

1. 九州支部例会報告

九州支部会員の例会が、大分の KA さんご夫妻、KB さんご夫妻のお世話、大分の会員のお力添えで、緑豊かな豊後大野市の清らかな川を見下ろす別荘で下記の通り開催されました。楽しく美味しいバーベキューを挟んで自己紹介、サーバス受け入れ及びサーバス旅行体験等で会員間の親睦と情報交換ができ、お互い親戚・兄弟・姉妹のような雰囲気となりました。参加の日本サーバス会長から、韓国の済州島のサーバス会員が九州の会員と交流を持ちたいとの希望があるとの報告を受け、次回の例会を韓国の済州島で開催しようという計画が持ち上がりました。時期は1月末頃では・・・という計画で、会長と支部長が検討することになりました。

参加者は、KA さん宅、KB さん宅及び別荘に分かれて泊まり、それぞれのところで夜遅くまでサーバス談義に花が咲きました。朝は再び別荘で盛り沢山の手作り朝食をとりながら、これからのサーバス九州支部のあり方や会員をどうやって増やすかなど、話の終わりようもない状況で、会員のその日の行動を考え、例会を終えざるを得ませんでした。解散は10時過ぎでした。参加者は27名（男性13名、女性14名；会員25名、非会員2名）でした。

- 1) 例会内容：バーベキュー、サーバス受け入れ及びサーバス旅行体験情報交換
- 2) 開催期日：2007年 8月 25日（土）
- 3) 会場：KA さんの知人別荘（住所：大分県豊後大野市清川町三玉）
- 4) 会場での受付開始時間：14：30以降より
- 5) 例会及びバーベキュー等：16：00開始、21時頃まで
- 6) 会費：飲食代；男性2000円、女性1000円、宿泊代1000円

例会その後： 次回の例会を済州島で・・・との計画について、会長と支部長で検討した結果、1月末は気温が低く風が強い日が多いとのこと、また、この時期に両者ともに休みをとることが容易でないこと等の理由から、次の7月から8月に延期する予定です。折角、1月の予定のご期待に添えませんが、ご理解いただきますようお願い致します。

2. トラベラー受け入れ報告

○ 会員崎市)

- 1) 期間： 5月23日～5月24日； Jさん(M)、Eさん(F)（ベルギー、33才、32才）

若いカップルで、去年の7月から今年の8月まで、1年がかりの世界旅行中ということでした。あと一息で旅も終わり… という所ですが、Evelyn は妊娠中。… でも、良いですよ。私達も、こんな旅行を1度してみたかった！

- 2) 期間： 7月3日～7月4日； Cさん（ベルギー、男性、69才）

リタイヤした69歳のエンジニア。日本鋼管で仕事をしていたことがあるとか…。1年かけてシルクロード旅行やその他のいろいろな国を旅行されています。現代美術（エゴンシーレが好き）やジャズ（帰国後ベルギージャズ CD を送って頂いた）など趣味が豊富でした。残念だったのは、梅雨時で、ずっと雨にたたられた事！でも、気温は気に入ったそうで、ベルギーの雨は寒いそうです。出発前の時間を利用して案内した諏訪神社の英文おみくじを気に入ってもらったようです。

皆さん、箸も使えるし、刺身も好きでした。（特にフランス人、ベルギー人のチャールズさんは、刺身はもちろん納豆もおいしい、美味しいと食べていました。）

○ 会員（国東市）

期間： 6月8日～6月9日； Bさん（イスラエル、男性、24才）

彼はトラベラー認定書が期限切れでしたが生活マナーがとても良かった。帰り着いてから直ぐに感謝のメールも届きました。

○ 会員（大分市）

期間：7月5日～7月7日；Cさん（ベルギー、男性、69才）

彼が大分に来た大きな楽しみの一つに、阿蘇山に行く事があったようでしたが3日間とも雨でご案内できず、その代わりにご案内した雨の白杵をすっかり気に入ってもらい少しホットしました。旅行と話が大好きな方で、彼がトルコからシルクロードを1年間かけて旅行した話や、ふるさとベルギーの事、日本で見聞したこと等、3日間親交を暖める事が出来ました。

○ 会員（豊後大野市）

1) 期間：6月3日～6月5日、6月6日～9日；サン ドラ（ドイツ、ミュンヘン、女性）

最初の3日間を我が家でホームステイしその後宮崎に行き、コースの関係からもう一度我が家に帰り、矢部の方に向かいましたが、楽しい時間はあっという間ですね。物静かな、それでいて芯のしっかりしたドイツ女性でした。シンプル、イズ、ベストとは、彼女のためにある言葉ではないかと思ったほど素敵な人でした。来年の春には又来ます、という言葉が嬉しかったサンドラでした。

2) 期間：7月27日～7月30日；Bさん（スウェーデン、男性）

奥様が日本人で岡山県の方ですが、別行動とかで、彼一人ホームステイでした。中学校の理科の先生でしたが、兎に角楽しい方で、お話好きな方でした。夫婦共に再婚とかで、それぞれのお子様がいらっしゃるそうですが、お国柄でしょうか、それがごく普通だと言わんばかりのお話の仕方にやや戸惑った事は確かです。スウェーデンからの方は初めてでしたから、大変よい経験をさせていただきました。

○ 会員（宮崎市）

期間：6月5日～6月6日；Sさん（ドイツ、ミュンヘン、女性）

久しぶりにホームステイを迎えて宮崎近郊を案内しました。サンドラさんの住むミュンヘンは内陸地方です。海で泳ぎたい気持ちでしたが、準備ができなくて、波が打ち寄せる青島の浜辺を足首まで濡らして裸足で歩きました。とても気持ちよくて、後日水彩画に描いて展示会に出品しました。題して「気持ちいい～～」。

鶴戸神宮では、朱の衣装を着けた巫女さん達と並んで写真を撮って、あとで巫女さんの説明をしましたが、日本人でもいざ説明となると難しいものです。鳥居はなぜ朱いのですか。なぜ神様はたくさんいらっしゃるのですか。下駄を履くのはなぜですか。太陽を神様としたのはなぜですか。朱い色と神様の関係は何ですか。助けてー誰か説明お願いします。綾の焼酎とワインの試飲では（運転者一人を除いて）行った人全員ニコニコ顔になりました。定番コースの平和台は、樹木が高くなりすぎて展望が以前ほどきかなくなりました。埴輪（はにわ）公園の前で「はにわポーズ」をして記念写真を撮りました。宮崎のサーバスメンバーも、Sさんと一緒に宮崎の初夏を楽しみました。

○ 会員（宮崎市）

期間：9月7日～9月10日；R（スイス、ジュネーブ、女性）

まだまだ暑い盛りの9月、スイスのRさんを宮崎駅に車で迎えに行きました。40才とは思えない若々しい活力あふれる女性でした。宮崎のサーバスの仲間に、綾の吊り橋、酒仙の杜や日南海岸方面を一日かけて連れて行って頂きそこで会話も弾んだ様子でした。2泊の予定でしたが、こちらが勧めて3泊となり、家の近くの日本庭園に行ったり、海江田の遊歩道を散歩したり、また、家でささやかなお茶会をしました。娘に近い年齢ではりませんが、女性同士の内輪話などで大いに盛り上がり、人間的なふれ合いは、とても楽しく、愉快でいつまでも心の

中を暖かくしてくれました。いつかまた再会の日を約束してお別れしました。

3. サーバス旅行報告

○ 会員（佐世保市）

10日から5日間、メルボルンで行われたミツバチ関係の国際会議に出かけ、五島の宇久島でのニホンミツバチ復活活動の経過を中心に報告してきました。注目を集め、375本の報告の中から選ばれ、次号の機関誌に全文が掲載されることになりました。

10日間オーストラリアにいましたが、そのうち2日はメルボルンのサーバスメンバーの弟さんである養蜂家の家に泊まり、丸1日蜂の世話をしました。広い平らな大地で働きました。

ところが、この1日が私に強烈な衝撃を与え、今でも、いや日ごとに恐怖感が募っていています。ミツバチはユーカリの花を主な蜜源としているのですが、今が春で、例年なら満開で蜜が無限に貯まる季節です。それが温暖化で長く雨が降らないために花がまだ咲かず、オーストラリアの大地からミツバチが消滅しようとしています。養蜂家は破産の危機にあります。去年は西岸のパスでこの会議が開かれたのですが、私は出席しませんでした。その報告では養蜂業の無限の可能性が示唆されていました。空気が乾燥しているために蜂蜜がとても濃くなるのです。日本の蜂蜜はとても太刀打ちできません。それにユーカリの蜜は味がすばらしい。ところが今年はこんな状況になってしまいました。このことにまだ世界は気付いていません。今年の会議でも誰もオーストラリアのこの危機について発言していません。

私が恐怖感に囚われるのは、ミツバチどころか、世界の穀倉地帯から突然小麦が消滅するのではないのかという不安です。

終戦の前後に全島にわたる開墾の結果、五島列島から野生種であるニホンミツバチが、蜜の花を失って消滅したのですが、現在、その島々に再びニホンミツバチを復活させようと、プロジェクトを組んで取りかかっています。

最初に、ニホンミツバチが消滅した経緯を調べたのですが、そのときの経験から、ミツバチが環境の変化を敏感に反映する昆虫だということが分かりました。オーストラリアで今、この昆虫が警告を出していると思います。この警告を人は真剣に受け取らなければならないはずです。

○ 会員（筑紫野市）

フランスを訪ねて（6月20日～7月2日）

6/20、トラベラー会員の唐津の友人とパリに入る。会員5年目にして初のサーバスの旅である。実は入会直後に美術館を廻りたいと初めてひとり旅をしたのもパリだった。憧れのアパートマンを借りて5泊した。友人もフランスは始めてだったのでゆっくり過ごしたかった。ところがのっけからのハプニング。空港からのバス移動は大渋滞、おまけにメトロに乗り換えた途端に停電ししばし真っ暗汗はダラダラで予定より随分遅れてアパートマンに到着。暖かい時期にはよく停電するそう。前は節約した為郊外のホテル泊まりだった。それで今回は便利なシャンゼリゼに近いモンテニュ通りの一本裏という便利な場所にした。メトロの駅も近くセヌ川越しにライトアップされたエッフェル塔も満喫できる。少々高いが納得、場所柄安心して歩くことが出来た。キッチン付きなので早速凱旋門近くを買出しに出掛ける。夜10時近くまで明るい為まだかなりの人出だ。ところが帰り道ふたりとも何だか身体がふわふわとする。機内で16時頃に夕食をとって以来何も口にしていなかったのだ。23時頃遅い夕食をとる。

6/21、朝、歩いて15分程のエッフェル塔に向かった。パリはそれ程大きくなく観光スポットが見て取れるので観光前に登るのもいいと思う。道を間違えアパートマンに着かずにシャンゼリゼ通りに出てしまった。前日のめまいはもう味わいたくない。賑やかな通りのベンチで通りの向こうのライブをBGMに大笑いしながら手作りのサンドイッチを頬ばった。

午後、モンパルナス駅に TGV の予約に行った。旅行シーズンなので何より先に済ませたかった。ニースへ移動の一部の TGV が既に満席で二度乗り換える事になった。無事に予約を終え一息つこうとモンパルナス駅前のかつて有名な画家や作家達が集った所縁のカフェに入った。「ル・ドーム」という名のそのカフェは 100 年以上前の創業で店内の雰囲気も素晴らしく訪れた著名人の額入りの写真が壁に並んでいる。ところが店内は耐え難いほど臭い。おそらく長年の葉巻、タバコ、料理その他諸々の臭いが染込んでいるのだろう。友人は幸か不幸か旅の前に次男の結婚式があり多忙を極めひどい風邪をひいて匂いを感じなくなっていた。ケーキを頼もうとすると両手で持つほど大きなミルフィーユしかなく「大きすぎる！」と言うと任せるとばかり二つに分けてくれた。それでも大きいのだがとても美味だった。

夕方、デイホストのアニーと会う予定だったが都合で会えなくなった。丁度シテ島にいたので 5 年前は長い行列を見て諦めたノートルダム塔に登ることにした。幼い頃、オスカー俳優チャールズ・ロートン主演の映画「ノートルダムのせむし男」を見て以来憧れの場所である。素晴らしい眺めもさることながら大感激である！ バトーバスに乗って帰った。

6/22、午前中ジベルニーへのバスツアーに参加した。交通の便が悪いのでツアーの利用は便利だ。前回は 4 月に行ったので蓮の花を見ずじまいだった。朝から雨がぱらついてモネの庭は緑も鮮やかである。緑の匂いと鳥のさえずりに囲まれての散策は楽しい。モネの自宅の庭は花が一通り終わって少なかった。4 月には花が咲き乱れていたのだが。帰る頃には土砂降りになりパリに戻るとまるで嵐だった。ルーブル美術館の側で解散したのでそのまま美術館に入り友人が見たがっていたモナリザやミロのビーナスなどを見て私の大好きなフェルメールの絵を心行くまで楽しんだ。久しぶりに再開されたオランジェリー美術館ではあの大きな蓮の絵を堪能した。モネ一色の一日となった。

6/23、朝からどんより雲が厚く肌寒い。フランスも異常気象だ。10 時過ぎ、橋を渡ってすぐの RER の駅からヴェルサイユに向かった。およそ 20 分で到着、もうすっかり晴れ渡り観光客が宮殿に吸い込まれていくような錯覚を覚える程多かった。宮殿内は素晴らしくまた広大な庭園の美しさも息を呑むようだった。中でもマリー・アントワネットが作らせたという村里の牧歌的な空間は心が和んだ。その畑で大好きなふだん草が青々と育っているのを発見、フランス人も食べるのかと嬉しくなった。茹でた後油揚げと炒め砂糖、醤油で煮びたしにすると美味しくいただける。気が付くと 16 時、パリに戻ったが実によく歩くせいか足が痛くなってきていた。足に優しい靴を作るフランス・メフィスト社のサンダルを二人で色違いで買った。この靴のお陰で旅の後半は実に楽に過ごせた。まだ日が高いので凱旋門にも上った。汗を流した後、歩いて数分のセーヌ川沿いのカフェに出掛け大好きな黒ビールを傾けながらライトアップされたエッフェル塔の夜景を存分に楽しんだ宵だった。

6/24、オペラ・ガルニエに出掛け懐かしいシャガールの天井画に再会した。ヴァンドーム広場を抜けノートルダム・ミサに向かった。ヴァンドーム広場には独特の空気があり大好きな場所だ。日曜日のノートルダム寺院ではパイプオルガンの演奏に荘厳なミサ、その場に身を置くと胸に迫るものがある。マリー・アントワネットが幽閉されたコンシェルジュアリー、パリで一番美しいといわれるサント・チャペルのステンドグラス。長い行列もさることながら入場時の厳しいチェックは知らなかったがイギリスで起こったばかりの爆発テロの影響だったのだろうか。マレ地区にも足を延ばしひよこ豆のコロッケで有名なファラフェルを食べようと人気の店を探した。長い行列に加わったがそれ程美味しくない。実は一番人気の店はもう少し通りの先だったようで後の祭りだった。マレはゲイの街としても有名で実にたくさんのカップルを見掛けた。雑誌から抜け出たようなハンサムなカップル、坊主頭のカップル、中年男性と若い男の子のカップルなど様々。この街ではしっかり市民権を得ているようだ。早めにアパートマンに戻りシャッターを閉めてしばし午睡する。効果絶大で元気を回復、明日の移動に備え荷物の整理、洗濯、掃除などを済ませた。

6/25、5 時半にチェックアウトをし、タクシーでモンパルナスの駅へ。モン・サン・ミッシェル行きの列車とバスの直行便は日に 3 本しかない。7 時 5 分発の TGV に乗っても 11 時到着だ。パリは雨だったがそこはすっかり晴れ渡っていた。名物の大きなオムレツは美味しくないと思っていたので辺りの塩分を含んだハーブを食ん

だ子羊のグリル、そば粉のガレット、りんご酒のシードルをオーダーした。塩分はやや強くかなり美味しかったが値段の高いこと。テロ以後コインロッカーの使用が殆ど禁止されていて荷物を持って廻らなければならない。細いメイン道路は大きな石畳の急な坂でゴロゴロと引いていくのは大変だ。とうとう途中で一人が荷物番をし、交代で見て廻ることにしたので修道院には入れず終り。バスに乗り込んだ途端に強風とまたどしゃぶりになる。私達は晴れ女なのだが今回もラッキーだ。Fの家に向かった。二人は50代の高校の英語の先生で今年の夏我が家に滞在した。唐津の友人宅に出掛け美しい虹ノ松原や唐津くんちの大きな山車を納めた会館などへ案内した。その友人が今回の旅の連れで二人とは11ヶ月振りの再会である。元気なフランソワーズは17世紀に建てられた古い家の一角を買って住んでいて外国土産を上手に飾っている。木目の美しい古い階段は足に優しく柔らかくすっきり気に入ってしまった。シャンソンをBGMに食事の用意をしながら話しが弾む。「この歌手知っている人よ。二度は会ったはず。」と言われるがどうにも分からない。何とそれはFのCDだった。そういえば我が家で一歳になりたての孫にララバイを沢山唄ってくれたものだ。友人は英語を話せないで二人一緒がいいだろうという二人の配慮でジョエルのお宅に泊まることになった。早朝パリを出てこの日は12時頃まで話し込んだのでジョエルの家に着いた途端ベッドに直行した。

6/26、学校が違う為Fは昨日で学期終了、Jは今日の午前の会議で終了だ。Fが10時過ぎに迎えに来たがほんの30分前に起きたばかりとのこと。「私の車は25年物で古いのよ」と言われて車に乗り込んで仰天。確かに車内は砂や小石やいろんな物が散らかっていたがそれはいいのだ。驚いたのは助手席の私の前のボックスに水が一杯に溜まっていて印刷物の切れ端がいくつもプカリプカリと浮いている。「これ、なあに？」と聞くと「どっか穴でも開いてんじゃない？」とけろっとしている。おしゃれな彼女とこの車の取り合わせが何とも不思議だった。

午前中Fの住む旧市街を案内してくれた。彼女の勤める高校にも立ち寄り、石畳の坂の街は落ち着いて趣があり通り過ぎるだけではあまりに惜しい。カフェでお茶をしたりゆっくり散策してみたい、そんな魅力あふれる街だった。美術館も沢山あるのだが時間が足りない。是非また戻ってきたいと思う。黒と白の独特の配色の城壁は硬いスレートと柔らかい川原から取れたチョークで組まれている。この城はかつて「地の果て」と呼ばれていたそうである。

午後ジョエルと合流し昼食をとった。Jは物静かで心優しくFとは実にいいコンビだ。午後、ロワール川沿いのいくつかのビューポイントに行き、近くの島にある自然の岩を壁の一部や部屋にそのまま利用した小さな教会にも行った。ステンドグラスは白や青、黄色の色使いでシンプルだ。この地域は頻繁に水害に見舞われる為絵葉書も水害時のものだ。面白い。15年ほど前は水位が7メートルにも達したという。

また、5～6代に渡って家族が住み続けているという美しい城やFがいつもワインを買うワイナリーにも行った。残念ながら友人はワインアレルギー、私も量は飲めないという始末、それでもテイastingは楽しかった。昼食を家で済ませたので私達からワインをプレゼントした。明日はまた朝が早いのでFとはお別れである。別れ間際に地下のワインセラーを見せてもらった。鍵のある木製の柵がありまるで昔の牢獄のような造りで面白かった。この夜も12時頃まで話し込み又もやベッドに直行だった。二人の心のこもったもてなしが胸に沁みた。

6/27、TGVが7:07発だというのに心配げな私達をよそにジョエルは、時間はたっぷりあるとのんびりしている。結局彼女の勘違いで危うく乗り遅れるところだった。古城巡りの拠点のトゥールに到着、シュノンソー城とダビンチが晩年を過ごした亡くなったクロ・リュセ城を訪ねるバスツアーに参加した。午後はトゥールの美しい教会や旧市街を散策、バーゲン初日で街は大賑わいだった。今夜お世話になる会員のフロレンスに花を買い夕刻汽車で10分程のモントルーに向かった。ホームで彼女が出迎えてくれ、家に向かう途中ロータリーや公園の一角などにある彼女のモザイクの作品などを見せてくれた。彼女はアーティストでご主人のKはビデオの編集をしている。「びっくりするかもしれないから言っておくわ」と一年前にご主人が医者の手落ちで車椅子生活になったと聞かされた。ひどい話だ。Kは物静かな優しい眼差しのご主人で13歳のPは映画に出てくる小公子のように可愛かった。お姉ちゃんは学校の旅行で留守だった。古い家を買って12年かけていまだ改装中なのだそう。

私達もリフォーム中の部屋に泊めていただいた。猫が5匹、子猫が4匹いて賑やかだ。庭先の古い小さな農家を最近買ったばかりでいずれフロレンスのアトリエにするのだとか。Kが車椅子で伸びた草を分け案内してくれた。荒れてはいたがまるでハイジの家を思わせる小さな家でどんな風に変わるだろうと想像するとわくわくした。大変だろうが古い物を大事に活かす暮らし方を羨ましく思う。PCの衛星写真で我が家をお見せしフロレンスのアーティストとしてのサイトも見せてもらった。洗練された、力強い主張のある作品を生み出す方だった。翌朝これまた早いTGVに乗る為挨拶を済ませてベッドに入った。

6/28、鳥が囁き始めまだ白みかかった早朝、用意してあった朝食を食べ起こさないように予約してくれていたタクシーに乗り込み別の駅に向かった。車椅子対応のタクシーだ。6:31発のTGVでリヨンへ。リヨンでは二時間あるので世界遺産のフルビエール寺院へ行く積りだったが時間が足りず近くのマルシェをのぞき駅前の高層ホテルでお茶をしつつ素晴らしい絶景を堪能した。残念ながらレストランからしか世界遺産は見る事が出来ないそうだ、成る程。リヨン駅の案内所で「荷物を預かりますよ」との好意に甘えた。マルセイユへの車中、突然前の座席の中年男性が痙攣を起こし息も出来ぬ程になった。同行の女性達が声を掛けている。隣の席の女性が居なくなったと思うと医療関係者が乗り合わせていないかと協力を求めるアナウンスがあった。ほどなく車掌、看護婦らしき女性が、また医者らしき男性が現れた。おまけに僧服をまとった牧師さんまで現れたが発作が治まったので顔を出さずに戻られた。その迅速な自然な対応と緊急事態に力を合わせる姿を見て思わず胸が熱くなった。乗り換えたマルセイユでは駅を出ると市街地が眼下に広がり駅が随分高い所にあつて驚いた。ニースに到着したのが17:04、およそ11時間近い汽車の旅だったが実に楽しかった。Pから大々的に道路工事中だと聞いてはいたが駅から約束のマサナ広場まで15分程まるで阿弥陀くじのようにジグザクに歩かねばならなかった。ここでは旧市街にあるPのアパートマンに三泊お世話になる。昨年我が家に滞在した70代の物静かな上品な男性である。いつでも好きなだけ滞在していいとお誘いを受けていたのだ。実は今回ご本人はフィンランド、スウェーデンを旅行中で留守宅にお邪魔した次第である。ハンサムでちょっとキザな映画俳優みたいな息子さんのMが迎えてくれた。リフトの無い5階なので結構大変だ。彼が軽々と二つのバッグを抱えて上がってくれたが帰るときは・・・まあまだ考えないことにしよう。小窓からは朱色の丸い瓦屋根の向こうにあちこちの窓から洗濯物がぶら下がり、おまけに猫が屋根の上からじっとこっちを見つめている。まるでフランス映画の一場面だ。テーブル一杯にいろんなパンフレットが私達のために用意されていた。夕食は地元の名物ソッカ（豆の粉を平たい大きな鍋でクレープかお好み焼きのように窯で焼き上げた物）を試した。少し油っこいほんのり甘い味だった。大移動の一日だったのでぐっすり眠れた。

6/29、午前中鷹の巣城のひとつ、エズに立ち寄った後モナコへ向かった。エズへはバスで行くと山手から海辺の絶景が素晴らしいとカンヌから乗り込んできた日本人の新婚さんから聞いたのだがその通りだった。何でもハネムーンなのにずっと喧嘩ばかりしているそうである。バス賃がニースからモナコまで1.5ユーロと随分安かったのが驚いたが車が増えた為に頑張っているんだとか。エズは岩肌にホテルや土産屋などがひしめいていて石畳の趣のある所だ。頂上に城址の一部が残っており今は植物園になっていてTV番組で見た「姑の座布団」といわれる丸い大きなサボテンを見つけて大笑いした。友人もほやほやの姑である。憧れのモナコではカジノの近くでバスを降り歩いて見て廻った。どこも実に美しく、青い海には白いクルーザーが並び丘の上には王宮が見える。ポート近くでは乗馬競技会が開催されていて大好きな馬にしばし見とれてしまった。ニースに戻りPお勧めの近くのレストランに行った。地元の人で大賑わいだったが蛸は煮すぎて豚肉のように硬くパスタは前日の残り物のようにフニャフニャで食嗜好の違いを感じた。隣のカナダ人一家もチップをどうすると相談していたので多分同じだったのではないかと推察した。歩いて2分程の海辺にサンセットを見に行つたが砂浜は全く無く、川で洗われたような大振りの丸い平たい石ばかりで驚いた。歩くのも大変そうである。

6/30、ニース最後の一日だ。近くの城址のある小高い丘に登ると有名なリゾート地ニースの海岸線が眼下に広がる。丘のすぐ下がPのアパートマン、遙か彼方の山手まで朱色の屋根が続きサレヤ広場ではマルシェのカラフルなテントが並んでいる。有名なサレヤ広場のマルシェは人で溢れ、活気があった。旧市街をひとしきり歩

いてアパートマンに戻りあまりに眠いのでしばし午睡した。午後、念願のシャガール美術館に行った。当然バスセンターから乗れると思い 30 分以上待ったがバスは来ない。結局随分離れた新市街側が始発のバス停だった。空だった二人のリュックは土産物でいきなり膨らんだ。ニース最後の夜はゆっくりアパートマンで過ごしたいと中華料理を買い込んで豪華な夕食となった。狭い通りに顔を突き合わせるように 5～6 階建てのアパートマンがひしめく旧市街は実に楽しかった。P に感謝の憧れのニース滞在もあつという間に終わった。

7/1、早朝重い荷物を 5 階から降ろしまだ眠っている旧市街を抜け空港へ向かった。ニース発パリ経由の飛行機で日本へ。

こうして無事に旅を終えることが出来た。実に楽しかった。いろいろな暮らしぶりのそれぞれの人達と食事を共にし、交歓する楽しさは忘れ難いものとなった。サーバスの素晴らしさを実感すると共に何だか人生が膨らみそう・・・そんな 13 日間だった。

○ 会員（宮崎市）

7 月末のドイツの Freiburg での会議期間中の休みの日に、サーバス旅行ができないものかと、考えてはいたものの会議の直前までホテルの予約のこともあり、サーバス会員への連絡を取らないままに日本を出発した。Freiburg に着いてすぐさまホテル Intercity Freiburg から持って行ったドイツのホストリストの Freiburg の 15 会員の中で、宿泊の 2～3 日前に連絡可能な会員に電話した。一件目は会員が海外旅行中とのことでだめ、幸い二件目ので、4 日後の宿泊をお願いし快く引き受けてくれた。Hans(72 才)& Helga(70 才) 夫妻宅に 2 泊お世話になった。

Freiburg 市は、フランクフルトから南へ ICE の高速列車で 2 時間 10 分下り、黒い森の南西部にある人口 20 万人の町である。モザイク模様の石畳の道路の脇を流れる細い水路と美しい大学町である。市内からトラム 1 番線に乗り 30 分の終点で待つように連絡を受け、Helga さんが車で迎えに来てくれた。閑静な住宅地帯で、3 階建ての建物で、2、3 階に部屋があり、それぞれに 6 室ある大きな家で、広いリビングに H さんが迎えてくれた。到着したばかりの時、丁度夕食の準備中にもかかわらず、すぐ台所へ行き、準備の手伝いをさせていただき、とても気さくな H さんでした。H さんは医化学部の生体移植の分野で、H さんは生物生態学の分野で、それぞれ 60 才まで大学で研究と教育をされてこられたとのことであった。

食事をしながら、お互いの趣味や仕事、はたまた経済事情、教育事情など、会話に時間のたつのも忘れるくらい楽しいひとときであった。特に話題は、定年後の過ごし方で、Helga さんは 60 才で定年後、少しずつ仕事を減らしながら 65 才できっぱりと仕事をやめ、絵を描き始め、また、光を使った植物の対話の趣味に忙しい毎日とのことであった。テニスもやっていたけど足が悪くなり走れないから今やめている。H さんは定年後、読書、音楽、ラジオを聞いて家の中で過ごすのが楽しいとのことであった。スパゲッティを自分で作って食べるのがいいと、茹でてソースをかけるだけの簡単さがいい、とのこと。H さんが、さあー！ あなたは来年 4 月からどうする？ 今の趣味はテニスでしょうけど、painting を始めなさいよ！ としきりに冗談も加えて勧める気さくな人であった。明日の計画は？ と聞かれ、ロープウェイのある Bergwelt で、山の頂上まで行く予定だと話すと、では朝九時に車でロープウェイのところまで連れて行くからと実に親切であった。自分らでトラムとバスを乗り継いでいけるところではあったが、予定通り 30 分ぐらいのドライブの後、後は 1 日楽しんでトラムで帰ってきなさいとロープウェイのところまで送ってくれた。丸一日楽しんだ後、夕食をいただきながら、Hans さんの戦時中や戦後のドイツの状況の話は、大変興味あるものであった。小さい頃、ドイツ東北部で育ったことから、ソビエト軍のドイツ人に対する圧力的な恐ろしさは大変なものであったと。話の中で、日本式風で当方が年下のことから敬語をつけて Dr. K と読んでいたが、どうしても違和感があつことから、ファーストネームで呼んでもいいかと丁寧に問うたら、もちろん！ とのこと、それ以来、胸のつかえが取れて、更に親近感が沸くと同時に、H さんも H さんも前にも増して気軽に会話が進み、一段とサーバス会員宅の一員として受け入れられたという思いになり、別れるときは辛かった。

4. サーバス活動の感想

○九州支部例会参加の感想

会員（宮崎市）

8月25日の九州支部会は、大分の清川町の別荘にて行われるということでとても楽しみにしていました。宮崎の会員さんのご主人の上手な安全運転のお陰で、目的の清川駅へ難無く着くことが出来ました。

駅から別荘まで KA さんの案内で無事到着。山あり、川あり、キャンプ場は眼下にと、ロケーションのすばらしいところで感激しました。

大分のサーバスメンバーの方々の行き届いたおもてなしを感じつつ、夜の焼肉パーティでは、ホームステイの受け入れの楽しさや問題点等の話を沢山聞かせて頂きました。大分の皆さんがヴォランティアを楽しんでやっておられるのをすごく感じました。

宮崎在住の外国人は皆、宮崎は素晴らしい所と言ってくれるのに、宮崎は地理的に少し不便なのかトラベラーが少ないのが残念なことです。ミーティングの時、デイホストの出番がないので宮崎へのビジターをお願いしました。ラッキーなことに、二週間後支部長宅へ、スイス人の R さんがステイされ、デイホストのチャンス頂き、楽しい時間を過ごすことが出来ました。

5. 会費納入のお願い

今年度の会費の振り込みをまだされていない方は、下記の口座へ振込をお願い致します。

郵便振替先

口座番号 記号： 01950-6； 番号： 36441

加入者名住所： サーバス九州事務局

郵便番号 889-2153

宮崎市学園木花台南 1-2-9

6. トラベラー受け入れ及びサーバス旅行レポート等のお願い

トラベラー受け入れ又はサーバス旅行をされた方からの体験談・報告を下記の事務局へお寄せ下さい。会員間の情報交換になりますので、手紙又は電子メールなど短くても長くても、また、写真添付もよいですのでお願い致します。

観光案内

九州サーバス支部例会が開催された同じ町内、豊後大野市清川町奥獄川に架かる二つの石橋「轟橋」と「出合橋」を KB さんに案内頂きました。径間（アーチの両端を結ぶ距離）が全国 1 位と 2 位！とのこと。山奥の緑に囲まれ清流に架かる石造りの美しさがありました。

左の写真： 轟橋（径間： 32.10m、26.52m）、昭和 9 年に林道軌道橋として設置。

右の写真： 出合橋（径間： 29.30m）、大正 14 年に設置。

